

《研究ノート》

16世紀カトリック神学の一側面

——ドミンゴ・デ・ソト(1495—1560)『自然と恩寵』(1547) 序文をてがかりに——

林 伸 一 郎

本研究ノートでは、変革期であった16世紀にあって、人文主義やプロテスタンティズムの登場で、その存在意義すら問われることになったスコラ神学を担った一人の神学者の自著への序文の一部を取り上げる。そこには激動するこの時代において、スコラ神学が置かれていた思想状況が凝縮されているように思われる。我々はそこから時代の要請に応えようとする16世紀カトリック神学者の姿を見ることになるだろう。

我々が取り上げるのは、スペインのドミニコ会神学者ドミンゴ・デ・ソトの『自然と恩寵 *De natura et gratia*』¹⁾への序文である。まず本書の成り立ちを概観しておこう。

トマス・アクィナスの衣鉢を継ぐこの神学者は1545年に神聖ローマ皇帝カール5世によって勅任神学者としてトリエント公会議(1545—63)へ派遣され、聖書正典とウルガータ版の権威について論じられた第4総会、また義化に関する第6総会での検討作業に加わった。さらに第5総会で論じられた原罪の問題を加えて、『自然と恩寵』を、序文にあるように、この第5総会、第6総会での議論の「一種の弁護のようなものとして」著し、公会議の神父たちに献呈した。²⁾ トリエント公会議は「ルター思想の基礎である義化(義認)の神学に本質的な議論を献げた」³⁾と言われるが、その中心的神学者の一人がこのソトであった。この神学者が、そのためにいかなる方法論を、いかなる理由で選択したのか、その方法が神学において担う仕事は何か、などが以下の序文で語られている。そこでは当時のカトリック神学——人文主義の影響から信用失墜の状況にあり、またプロテスタントからは真っ向から否定された当時のスコラ神学——が陥っていた危機にあって、なおその伝統を受け継がねばならない意味が明らかにされている。では実際に彼の序文(抄訳)を見ることにしよう。

セゴビアのドミニコ会士ドミニクス・ソト修道士の『自然と恩寵』第1巻 「トリエント公会議の聖なる神父様方へ宛てた序文」

(略)

・本書のタイトル

この事態のゆえに、あれほど多くの、しかも同じように明晰な人々の後に——彼らは我々の立場から、この30年間、今問題になっている異端者たちと戦ったのだった——、私はこの『自然と恩寵』という作品を準備したのだった。私は私のこの作品がこの公の問題に何かをもたら

しうのかどうか、よく考えた。他方で、私は、アウグスティヌスがペラギウス派に対して物したのと全く同じタイトルを、完全に似ているわけではない議論に付けたのだった。実際、アウグスティヌスが『自然と恩寵』において証明しようと意図していたのは、ただ傷つけられ、弱められた自由意志の弱さであり、その欠陥だけであった。そのような自由意志にはキリストの恩寵が必要なのである。それに対して私は、きわめて尊敬すべき神父様たちよ、この書によって原罪と義化に関するあなた方のきわめてよく考えられた第5総会、第6総会に対する、いわば一種の弁護をするかのように、問題をより深く取り上げ直し、より広く明らかにすることに決めたのだった。というのも、もし私がこれらの論争を端的に論じるのではなく、どのような仕方でもこの件に役立ちうるようなあらゆる題材を順序通りに次々と論じるのなら、つまりもし私が一般的に、神の一般的協働とともに我々の自然本性は、人間の義務の中の一体何を行うことができるのか、そして次に、我々の自然本性は、[神の]特別な好意と恩寵の助力を欠く時には何をなしえないのかということを中心の注意を払って検討する場合には、ルター派とのそれらの論争はより明確に論じられるであろうと私は判断したからである。それゆえ、私は我々の本性を4つの状態とハビトゥスに区別しなければならないと考えた。従って、私は純粹に自然本性的能力の中に想像された (*mente excogitatum*) 人間を、実際に原初の義に創造された人間を、そこから罪へと堕落した人間を、そして最後にその後、恩寵へと回復された人間を記述するつもりである。

・配分

しかし本書の配分は、3つの連続する巻にある。われわれは、その最初の巻では、つまり人間の侵犯を扱う巻では最初の3つの状態を説明した。義化に関する巻では、人間の和解の普遍的原因とさらにその諸様態を明らかにした。義化された人間の能力と恩寵の確実性に関する最後の第三巻では、最後の議論を付け加えた。こうして第一巻はいわば第5総会の注釈であり、それに対して残りの二つの巻は第6総会の注釈なのである。実際、以上のことがよく考えられると、次のことを完全に理解できる。つまり、人間はその自由意志でどこから追い出されたのか、次いで神の恩寵によってどこへと呼び戻されたのか、ということである。

・スコラの文体は斥けられるべきではない。ルター派の策略

さらに、我々は文体や議論の進め方として、スコラの形式をまったく斥けてしまったわけではなかった。とはいえ、スコラ神学者たちの名前がルター派にとってどれほど憎むべきものであり、嫌悪すべきものであるのか、私は知らないわけではないのである。確かに、このことによって、この者たちははじめから何か、それによって彼らがこの戦いを教会にもたらし始めたもの(原因)を指示していたのではないだろうか。

また彼らは人間たちの位階の一つ一つをととても恐れていたために、自分たちに対する彼らの権威を粉碎したところで、最大の憎しみゆえに、彼らを追撃し、非難によって罵倒し、きわめて激しく呪いの言葉を投げかけ始めたのだった。そしてまたそれゆえに、彼らをいわば敵ではないかと疑って、対話や討論から追い出したのであった。

・スコラ神学は不当に投げ捨てられている。

こういう訳で、彼らはスコラ神学者たちに公の不幸として罵声を浴びせたのである。デモステネスの物語におけるように、家畜の犬たちは群れの番犬であるので、オオカミたちには憎むべきものでしかないからである。⁴⁾ところで、それが神々の意志であり、いわば彼ら自身が世界に法を設定しなければならない者であるかのように、カトリック信者の中にあって、この者たちの言うことを聞いて、問いを立てる者たちを低く評価し、哲学を投げ捨て、ただ言語という料理だけで宴会を準備しようとする者は多い。彼らは、言語の知識とその助けによって、テセウスがいなくても、自力で、教父たちの書ばかりでなく聖書の諸巻にも着手することができると考えているのである。まったくそのような悪に対して（それは私が公会議であなた方の聖なる方の前で論難した悪である）あなたが公然と立ち向かうのであれば、そして大学が自分たちと公の善のために決議を急ぐのであれば、たちまち全キリスト教国が誤りを噴出させることに我々は苦しむことになるだろう。どうしてそうでないことがあろうか。誰でも熱心に3つの言語に通じようとするために、トリスメギストスはこの伝説の泉で唇を洗ったかのよう⁵⁾に、秘儀を受けた者の中で最高の権威をもつものとして現れたのである。確かに私のこの訥弁に対する言い訳としたいようなものは何一つない。というのも、私は、細心の注意を払って言語を磨き上げること以外の方法で研究を遂行したと正直に告白するからである。もしどちらか一方を選択しなければならない場合には、私はキケロ風の雄弁に近い雄弁が与えられるよりもキリスト教的聖霊に近い霊が与えられるほうがよいだろう。

・諸言語の知識は必要である。スコラ神学は浄化されなければならない。

しかし私は言語の知識とその陶冶－今の時代、人々はこれまで以上にその陶冶に余念がないのだが－、それが聖書の理解に大いに役立つということを否定はしない。それはアウグスティヌスが『キリスト教の教え』第2巻⁶⁾で我々に勧めていることである。しかし逆に次のことは確かであると私は主張する。つまり、目が眼病に苦しんでいるからといって、すぐに脳から引き抜かれるのではなく、洗眼剤によってそれが最高に役に立つように治療されるように、またスコラ神学の内容 (res scholastica) も刈り込まれなければならない、すなわち、屁理屈の冗談から、また形而上学者たちの空しい絵空事から浄化されねばならない。スコラ神学の内容は何人かの著者たちにおいては、これらの汚れによって、不当に汚されているからである。しかし、もし我々が大多数の人々が「神学者という」名前を持つことを望むのではなく、だが極めてわずかな人だけが本当の意味での神学者であることを望むのなら、スコラ的問題（仕事・方法）が完全に滅びることがなく、むしろそれが回復するように、細心の注意が払われなければならない。

・教父は哲学に精通していた。

さらに教父たちにはこの問いによって議論するという、はっきりとした方法は存在してはいない。しかし彼らは最高の哲学者たちであったので、このアリストテレス哲学的形式を知っていたことは明らかである。たとえこの形式が聖なる雄弁によって説明されるべきものの中では確かに必要ではなかったのではあっても、それでもアウグスティヌスや他の教父たちにおいて、たいていは姿を見させている。この時代の後、この形式が神学者たちの学派（スコラ）において

受け入れられた時、もしそれが方式、方法、規則として教えられるのなら、この方法によって最も健全な信仰が産み落とされ、育まれ、擁護され、堅固なものにされるということ でなければ、その目的は一体何なのであろうか（アウグスティヌスが『三位一体論』第14巻で言っているように）。確かに聖徒たちの言葉、特に聖なる人々の雄弁でもって解釈するどんな方法が、ある箇所が問題にされる場合よりも完全で、洞察力に優れたものでありうるのか。主題がその原因から説明される時、その本当の意味はそこから引き出されるというのに。例えば、トマスやボナヴェントゥラ、その他のスコラ神学者たちにおいて、見通す（perspicere）ということはそういうことである。

・人間にとって推論は生得的なものである。

というのも人間は理性的動物であるからであって、それゆえに人間はどこからでも真理を発見し、その原因から真理を演繹するためには、どのような力や方法によろうとも、推論と論述にかなうものは持っていないのである。さらに、事物の自然本性的原因を探索し、帰結を判断し、相反するものを調和させるために、要するに、何であれ、知らないものを最奥の隠れ家から明るみに出すためには、順序立てて行われる場合の討論やそれ以外のスコラ的訓練以上に助けになるものはない。

・信仰は自然本性の完成である。

こう付け加えなさい。（この者たちが言っているように）信仰は自然本性を斥けるのではなく、確かに完成するのであると。それゆえに、それらはお互いに光で満たし合う。もちろんその結果、最大の信仰は自然本性の秘密、以前には哲学者たちによっては近づきがたかった秘密を教えたのであり、こうして逆に、信仰の秘密を理解し、説明する際に、自然事物の認識が大いに役立つのである（ancillatur）。それは何よりも、このような神の秘密以外のすべて、つまり法律に、徳と悪徳に、人間の義務に、人間たちの契約や結びつきに関わるものすべて（それらはすべてキリスト教国において、特に研究される必要があるものである。）は、ただスコラ神学者のものだからである。それらは彼らによって論じられ、詳細に検討されるのである。

・哲学は時に害になる。しかしまた役に立ちもする。

スコラ神学者たちの推論を大部分、提供しているのは哲学である。しかし、彼ら（ルター派）は次のように言う。哲学者たちの学派はいつでも異端の工場であったと。確かに信仰がゆりかごの中で子供時代を過ごしていた時には、私はそれを否定しない。実際、そのとき、その問題は自然を超えていたのだが、半可通は同じ問題を自然に反するものと判断したのだった。この時にアリウス⁷⁾、サベリウス⁸⁾、この種の怪物たちは登場したのである。このゆえに、原初の正統派において哲学は評判が悪かった。しかしながら、もし彼ら（原初の正統派）が、哲学者たちを哲学そのものによって打ち負かしたような人々でなかったのなら、聖なる証言によってこれらの怪物たちに勝つことはほとんどなかったであろう。聖なる証言は彼らによって悪しき意味へとゆがめられていたからである。実際、アリウスが無敵だと考えていたような証明など存在しないと明らかにする哲学者が存在する必要があったのである。つまり、もし父が不可分な

本質であり、子も同じ本質であるなら、父は子のペルソナであるだろうということを明らかにする人々が必要であった。ベレンガリウス⁹⁾は哲学によって間違った。彼は秘跡の偶有性が基体なしでも存在することを否定したのである。なぜなら彼は基体なしに存在することが偶有性の本質に反すると駄弁を弄していたからである。今でもゲルマン人の多くがその誤りに囚われている。しかし、本当の哲学とは、そのことがまったく矛盾しないことを完膚なきまでに教えるものである。もし異端を生むようなえせ哲学者など存在しないということがありうるのなら、おそらくはこのような用途のために、異端者たちの企てを押しとどめるような、いかなる哲学も必要ではなくなることだろう。だが、(著者パウロによって)、異端がなくてはならないものであればあるだけ、いっそうのこと、哲学は神学者たちの間で大切にされねばならないと私は考えたのである。ペトロの言葉によれば、そのような哲学によって神学者たちは我々の中にある希望の根拠を問うすべての者たちに弁明する準備がよく整うからである。¹⁰⁾

・哲学の任務

実際、哲学の本来の使命は信仰の超自然的神秘を証明することでは確かにない。(確かに、それらはただ神の証言からのみ受け入れられるのである。)そうではなく、それらを説明し、哲学者たちに対して主張することである。哲学がこの哲学者たちの議論・論証を弱め、粉碎するまで、である。哲学は我々に対して勝利するものは何もないということを示すのである。そこで、パウロは司教に次のように勧告している。つまり、それによって健全な教えが励まされ、異論を言う者たちを反駁できるような信頼できる言葉を語るようにと。¹¹⁾ また実際にアウグスティヌスはマニ教徒であった時、その弁証論と哲学によって教会にとって大変な悩みの種を引き起こしたが、それだけに後に、彼は異端に対峙する時に、教会にとってよりいっそう役立つものになったのである。

・哲学は解毒剤に比せられる。この哲学がルター派にとって誤りの原因であったようだ。

きわめて賢明なるトリエント公会議よ、哲学を解毒剤と見なしなさい。というのも毒蛇の肉からできている哲学は同じ毒蛇の噛み傷を癒やすからである。これで最後とするが、いったい、ゲルマン人以上に言語をすどく磨きあげた者がいるだろうか。[彼ら以外の] いったい誰がアウグスティヌスやこの種の読まれるべき教父たちにより多くの時間を費やしたのであるうか。いったい誰が聖書を何度も繰ったであろうか。それゆえ、これほど多くの誤りの原因については、彼らがスコラ神学を無視したということ以外の一体何が残るだろうか。スコラ神学の無知から、すべての誤りが流れ出たということは、この問題を慎重に考える者にとって推測することは容易であろう。同じ彼らにおいて、言語の陶冶、スコラ的論拠・論証の軽視、そして異端の混乱がまったく同時に始まったのだった。(後略)

以上が、ソトの『自然と恩寵』の序文の抄訳である。この序文にはカトリック神学界を飲み込んだ時代の流れがよく現れているように思われる。以下では、1. プロテスタンティズム、2. 人文主義、3. スコラ哲学批判とその乗り越え、の3点を指摘しておこう。

1. 本書『自然と恩寵』の執筆意図に関しては本文に明らかな通りである。ルター派との論争点を

明らかにして、ルター（派）が提起した教義上の問題－原罪と義化－について、トリエント公会議での議論、従ってあらためて公会議でこの問題について規定されたカトリック教会の教義を擁護するためである。既に紹介したとおり、その議論には彼自身も積極的に関与していた。いずれにせよ、この序文の背景には当時のプロテスタントの出現とその広がり、さらにキリスト教信仰の根幹に関わるその問題提起を受けて、自己規定を改めて迫られていた教会の歴史的状況がある。

2. ソト自身はどのようにこの問題提起に答えようとしているのであろうか。この序文では彼が採る方法論的立場が明らかにされている。「民衆の希望や恐怖を食物にする、煉獄の教義とそれに結びつく贖宥状販売」¹²⁾に代表される、現実の墮落した教会を目の当たりにして、教会刷新のモデル・参照点として原始教会の信仰と実践を位置づけた改革派にとって、新約聖書と教父の著作は「教会刷新の青写真」¹³⁾を示すものであった。その点で、ルネサンスの人文主義におけるヘブライ語・ギリシア語研究の進展は新約聖書原典への直接のアプローチを可能にするものであり、人文主義者が切り開いた文献学的技術は「新約聖書の世界、それゆえ真正のキリスト教世界への鍵を握るもの」¹⁴⁾と見なされた。カトリック神学者の中にも、「彼らの言うことを聞いて」人文主義的方法－言語の知識と助けによって教父の書や聖書に接近する方法－をとり、「言語を磨き上げ」「キケロ風の雄弁」を求める神学者がいる一方で、ソトは自覚的に別の方法つまりスコラ神学的方法を選択したのである。

しかし彼は人文主義的研究の必要性を否定するわけではない。それも認めており、また人文主義的立場からの当時のスコラ神学への批判も知っていた。エラスムスの『痴愚神礼讃』に明らかにように、人文主義者たちは煩瑣で不毛な神学論争に明け暮れて、「一度たりとも福音書やパウロの書簡を繙く暇」もない当時のスコラ神学者を痛烈に批判していた。彼らの営為は「微細に輪をかけて微細な」その論議を「スコラ学派の数多くの論法がいつそう微細なものにする」と言われるほど、煩瑣巧緻なものとして捉えられていた。¹⁵⁾

ソトは人文主義からの、そのような批判を十分に承知した上で、スコラ神学の内容を「屁理屈の冗談から、また形而上学者たちの空しい絵空事から浄化」しなければならないと述べているのである。

3. ソト自身はこの人文主義的方法を自らの神学の方法とせず、「アリストテレス哲学的形式 *peripateticam formam*」を用いる「問いを通して議論する方法 *ratio per quaestiones disputandi*」を選択している。スコラがこの哲学的形式を受け入れ、それを教育しているのは、それが「最も健全な信仰」を産み、育み、守り、堅固なものとするからである。ソトはこの方法こそが、「理性的動物」たる人間にとって、真理を演繹する方法として最適なものであると、人間の定義に基づき、主張していることは序文に明らかである。

では神学と哲学の関係について、ソトはどのように考えているのであろうか。神学は哲学を必要とするのか、これはトマス・アクィナスがその『神学大全』冒頭で問うたことであった。信仰と理性の関係、また神学における哲学の役割についてのソトの論述の根底にトマスの思想が透けて見える

ように思われる。

例えば、トマスにおいて「恩寵は自然を廃するのではなく、かえってそれを完成する」¹⁶⁾と言われているが、ソトは「信仰は自然を廃するのではなく、確かに完成する」と述べる。ソトは、信仰は哲学者の近づき得ない自然の秘密を教え、逆に理性の認識は信仰の秘密を理解し、説明するのに役立つと語り、トマスは、「恩寵が自然を前提とするように、信仰は自然本性的認識を前提とする」と述べる。「信仰が自然本性的認識を前提とする」とはいかなる意味であろうか。その意味は『神学大全』第1部第1問第5項の次の記述が十分に伝えている。神学が哲学的諸学を必要とするのは「神学において伝えられることがらをよりいっそう明瞭にするため」であって、というのも、「我々の知性は自然理性によって知られることがらから出発する場合、この学において伝えられる理性を超えたことがらへと、いっそう容易な仕方で導かれる」からである。¹⁷⁾ソトの言う通り、理性の認識は信仰の秘密を理解するのに役立つのである。

さらにトマスによれば、哲学が神学の役に立つのは、神学が論証を必要とする場合である。原理の一部を共有する異端とは共有する原理から出発して論証を組み立て、議論することが可能になる。¹⁸⁾ソトもまた、異端それ自体が「えせ哲学」の産物であって、それは本当の哲学によって、同じ哲学という土俵の上で反駁されると主張している。哲学は超自然的神秘を証明するために必要なのではなく、自然を超えるものを自然に反するものとしか捉えることのできない「えせ哲学者」を論駁するために必要なのである。その意味で哲学は半可通のえせ哲学の影響からキリスト教の教えを正す「解毒剤」のようなものである。まさに「毒蛇の肉からできている哲学は同じ毒蛇のかみ傷を癒やす。」そしてソトはそのような哲学を骨格とするスコラ神学を無視したこと¹⁹⁾をゲルマン人、即ちルター派の誤りの原因として同定するのである。

以上のように見てくると、この序文は16世紀当時にスコラ神学が置かれていた思想史的状况をよく反映していることがわかる。そして人文主義の広がりやプロテスタンティズムの興隆の中で、スコラ神学がトマス・アクィナスを支えにしながら、自らの存在意義をそれらからの批判と対峙しつつ、切り開いていく姿を見て取ることができるように思われる。

ところで、ソトは、ルター派異端論駁のために必要なものはまさに「解毒剤」としての哲学であると考えている。しかし、神学において哲学を頭から拒否している異端に哲学的論証を受け入れさせることは可能なのだろうか。「トリエント公会議とともに幕を開ける時代はまた神学の多様化の時代」であると言われる。スコラ神学の論証はルター派には届かない。異端を論駁するためには、彼らと同じ言語を語る必要がある。事実、そのような意識から、スコラ神学とは別の方法論をとる神学者がいた。例えばソトの『自然と恩寵』(1547)とほぼ同時代、1552年にルーヴェン大学神学部で教授として教え始めた神学者M. パユス(1533 - 1589)は「聖書と古代教父の著作以外のあらゆる権威を拒否する異端」を考察したことから、神学研究を「聖書と古代教父の著作へ、少なくとも異端者たちに若干でも信用を享受している教父たちの著作へと連れ戻そうとした」と述べている。²⁰⁾プロテスタントたちは「聖書や教父の表現にしか耳を貸そうとはしなかった」ので、「カトリックの真理が今の時代に教えられ、異端に対して擁護されうる」ためには、「聖書や教父とともに考えるだけでなく、語らなければならない」と考えたのだった。²¹⁾こうして、プロテスタントの存在が教会の初期の言語に、つまり信仰や教義の源泉にできる限り忠実であることを旨とする神学を要請していた。いわば、時代はスコラ神学とは別の神学を要請していたと言えるであろう。

注

- 1) 本稿で使用了版は以下の通り。Dominicus Soto, *De natura et gratia*, Parisiis, Foucher, 1549,
- 2) V.Beltran de Heredia, art. “Soto(Dominique de)” in *Dictionnaire de théologie catholique*, t.14/2, col.2423-2424.
- 3) Jean-Yves Lacoste et al., *Histoire de la Théologie*, Seuil, 2009, p.299.
- 4) デモステネスとここで言及されている挿話については調査中。
- 5) トリスメギストスに言及されている連関について調査中。
- 6) アウグスティヌス『キリスト教の教え』第2巻第16章では「外国語の知識 (linguarum notitia) の必要性」が説かれている。Cf. Augustinus, *De Doctrina Christiana in Oeuvres de Saint Augustin*, 11/2, Institut d'études augustinienes, Paris, 1997, p.170.
- 7) アレイオス (アリュス) (250 年頃 - 336 年頃没) : アレクサンドリアの司祭。三位一体論に関する異端。父・子は同一実体であるという正統教義に対して、神を創造者、神の子を被造物であるとした。リーゼンフーバー『中世思想史』平凡社ライブラリー、61 頁。
- 8) サベリウス (217 年頃没) : 神の実体の単一性を強調し、御子が固有の実体を持つことを否定した、三位一体論に関する異端。浩瀚な教理発展史を記したペリカンはサベリウスについて、以下の布告を引用している。「もし誰かが公同的・使徒的教会が教えているように、父、御子、聖霊は、一つの本質、徳、力の三つの位格であることを告白しないで、サベリウス・・・が語ったように、父は御子と同じであり、この一人の方が御霊なるパラクレートスであるというような仕方、で、単独で孤立した位格であると語るなら、その者は断罪される。」ペリカン『キリスト教の伝統』第1巻、教文館、252 頁。
- 9) ベレングリウス (1005 年頃 - 1088 年) : ミサの聖体におけるキリストの実体的現存のような既存の神学的命題を弁証論を用いて論難した。彼は、実体と偶有性の分割不可能性にもとづいて、パンと葡萄酒の偶有性が存続する中でキリストの実体的現存を論破し、本質変化を否定するとともに聖体にただ象徴的意味のみを認めた。それは哲学的な議論を伝統的な権威に対して優先させた結果である。前掲『中世思想史』154 頁参照。
- 10) 『ペトロの手紙1』3, 15 : 「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」
- 11) 『テトスへの手紙』1, 9 : 「教えに適う信頼すべき言葉をしっかりと守る人でなければなりません。そうでないと、健全な教えに従って勧めたり、反対者の主張を論破したりすることもできないでしょう。」
- 12) Alister E. Macgrath, *Reformation Thought An Introduction*, 4th edition, Wiley-Blackwell, 2012, p.21.
- 13) Ibid.
- 14) Ibid.
- 15) エラスムス (杵掛良彦訳)『痴愚神礼讃』中公文庫、145 頁。
- 16) Saint Thomas d'Aquin, *Somme Théologique*, 1P, q.1, art.8, ad 2.
- 17) Id, 1P, q.1, art.5, ad 2.
- 18) Cf. 1P, q.1, art.8, resp.
- 19) 例えば、1517 年の『スコラ神学反駁討論』第43 命題「アリストテレスなしでは人は神学者にならないということとは誤りである。」また第47 命題「いかなる三段論法的形式も、神的なものに関しては維持されない。」、第50 命題「要するにアリストテレスの全著作と神学との関係は闇の光に対する関係に等しい。」などにアリストテレス哲学をその骨子とするスコラ神学へのルターの見方がよく現れている。Cf. Luther, “Controverse sur la théologie scolastique” in *Œuvres 1*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999.
- 20) M.Baius, “Reverendissimo atque illustrissimo domino Ludovico Simonetae cardinali “in *Baiana*, p.124-125.(*Michaelis Baii Opera*, Balthasar ab Egmont, Coloniae, 1696, republished in 1964 by Gregg Press.)
- 21) Ibid., p.76.